

氏 名	ソン 孫	ショウ 曉	ガン 剛
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)		
学 位 記 番 号	地 博 第 21 号		
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当		
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 ア フ リ カ 地 域 研 究 専 攻		
学位論文題目	Continuity and Dynamics of Pastoral Subsistence among the Rendille in Northern Kenya: With Special Reference to Livestock Management and Response to Socio-Economic Changes (北ケニアのレンディーレ社会における生業としての遊牧の持続と動態—家畜管理と社会的・経済的变化への対応—)		
論文調査委員	(主 査) 教 授 太 田 至 教 授 市 川 光 雄 教 授 島 田 周 平		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ケニア共和国の北部に住む遊牧民レンディーレを対象として、遊牧という生業の持続性とその変化の動態を分析したものである。遊牧とは、人間が直接には利用できない植物資源を、家畜を飼養することによって利用できるかたちに変換して生活する生業である。これは、乾燥した自然環境に対して巧みな適応をとげた生業様式であり、人間が乾燥地域に生活圏を拡大することを可能にした。しかしながら1970年代からアフリカの乾燥地域は、たび重なる早魃にみまわれ深刻な飢餓に襲われるようになった。また、一般的に遊牧民は飼養する家畜数を明示的にコントロールする管理体制をとらないため、過放牧によって砂漠化をひきおこす元凶であると糾弾されるようになった。すなわち「伝統的」な遊牧という生業は、早魃に対処しうるものではなく、環境破壊的で持続性を備えていないという見解が流布している。しかしながら、この見解に疑義をはさむ研究者も多く、また、社会的・経済的・政治的な環境が大きく変動する現在、遊牧民がその生業をどのように再編しつつ、変動に対処しているのかを明らかにする実証的な研究は少ない。本論文は、生態人類学的手法をもちいてこうした課題に正面からとり組んだものである。

本論文は、結論をふくめて6つの章から構成されている。第1章では、アフリカ乾燥地域の遊牧社会に関する従来の生態学的な研究をレビューし、本研究のフレームワークを提示している。すなわち、人間と家畜をふくむつよく乾燥した生態系を「非平衡系」とみなすニューエコロジーの考え方を採用しつつ、その系を、生態学的・経済学的・社会学的な要素がからみあう複雑なものとして把握し、総合的な分析を試みる必要があると論じている。

第2章では、本論文の対象となる人びとと地域の概要を記述している。レンディーレは東クシ系の言語を話し、人口は約27,000人である。この地域の自然環境は、降水量が少なく、その地域的・季節的な変動が大きくて予測が困難であり、早魃が不規則に発生する。そして近年には、社会的・経済的な環境の変化がますます加速しており、とくに、開発援助計画が実施されたことによってレンディーレランドに町が出現し、そのまわりには遊牧民の集落が定着するようになっている。

第3章では、レンディーレの人びとが営む遊牧という生業の実態が詳細に記述・分析されている。彼らは、ラクダ、ウシ、ヤギ、ヒツジという複数の家畜を飼養し、多様な環境利用を実現している。そして人口を集落と家畜放牧キャンプに二分し、主として集落には年長者と幼児、キャンプには青少年が居住する。そして年齢体系にもとづく分業と、クランを中心とする出自体系に依拠した協力関係によって家畜の放牧管理をおこなっている。また、家畜種別に放牧キャンプが編成され、そのキャンプは広範な地域を移動すると同時に、集落と放牧キャンプのあいだには季節的な人員移動があり、労働力の配分を調整しつつ畜産物の有効利用がはかられている。さらに本章ではこうした遊牧の実態を、25年前に同じ人びとを対象としておこなわれた先行研究と比較することによって、遊牧という生業の持続性と変化の動態を分析し、人びとが水場や植生、家畜の生理生態に関する在来の知識を駆使しつつ状況に応じて柔軟な対応をしていることが指摘されている。

第4章では、レンディーレ社会に現金経済が急速に浸透していることが、世帯の購買物に関する量的な資料や、町にある

店における「つけ買い」の資料、さらには結婚のときに必要になる消費財に関する資料などから実証的に示されている。また、人びとは家畜市場での価値が高いウシを従来よりも多く飼養したり、都市に出稼ぎに行くことによって、現金経済に対処していることが論じられている。

第5章では、ウシの飼養頭数が増加したにもかかわらず、レンディーレの人びとはラクダに社会的・宗教的に高い価値をおき続けていることが示されている。また、開発援助にともなって普及した井戸掘りをレンディーレが自発的にこなうようになり、個人や少人数の集団が所有する井戸が大量に出現していること、そしてこうした井戸の実際の利用方法をみると、その所有者が排他的に使うのではなく、広い社会関係のなかで共同利用していることが明らかにされている。

以上の記述と分析をふまえて、第6章では本論文の結論が述べられている。すなわち、レンディーレが営む遊牧という生業は自社会の内部で完結する閉鎖的なものではなく、地域の経済システムと深く結びついており、そして人びとは、生業としての遊牧を状況にあわせて柔軟に修正している。また、ウシの飼養を増加させたことや大都市へ出稼ぎに出ることは、遊牧を基盤としつつ生業活動を多様化させるという点においてリスク回避のメカニズムを備えており、人びとは町の出現と現金経済の浸透という新しい状況に能動的に対処している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、北ケニアに住む遊牧民レンディーレ社会を事例として、遊牧という生業経済の持続性とその変化の動態を解明することを目的としている。アフリカの乾燥地域は、降雨量が少ないために農耕はほとんど不可能であり、ここには遊牧生活を営む人びとの社会が広く分布している。しかしながら1970年代に入ってから、たび重なる旱魃によってこの地域の人びとの生活基盤は大きくゆらぎ、また、市場経済の浸透や国家の政治体制への統合がすすむなかで、遊牧諸社会は周縁的な位置に追いやられてきた。そしてサハラ砂漠の南進に代表されるような砂漠化現象は、この人びとが過放牧によって環境破壊をひきおこした結果であると論ずる者もある。そのため、この人びとが従来からおこなってきた遊牧という生業経済の有効性を根元的に問い直すことが必要である。本論文は、レンディーレ社会の事例分析をととして、この課題にとり組んだものであり、アフリカ乾燥地域の諸社会が直面している重要な問題を正面から研究対象としている点で高く評価できる。

本論文の対象となった人びとに関しては、1970年代後半に詳細な社会生態学的・人類学的な調査が実施されている。本論文の方法論的な特徴のひとつは、約25年後に同じ地域・同じ人びとを対象として現地調査を実施し、先行研究との比較分析を試みているところにある。こうした手法をとることによって本論文は、生業としての遊牧の持続と変容を具体的に分析することに成功している。また、生態学的な調査・分析と社会・経済人類学的な研究とを組み合わせる文理解融合的な研究を実現していることも、本論文の大きな特質のひとつである。本論文のもとになった一次資料は、1998～2003年にかけての合計18ヵ月間の現地調査によって収集されているが、身体的に過酷な乾燥地域において長期にわたるフィールドワークを実施し、緻密な資料を収集していることも高く評価しておきたい。

本研究の重要な学問的貢献のひとつは、この25年のあいだにレンディーレの人びとは生態学的にも社会的・経済的にも大きな環境変動を経験してきたにもかかわらず、遊牧という生業は、そのかたちを変えつつも基本的には維持されていることを、比較をととして明らかにしたことである。そして、年齢体系にもとづく分業や出自体系に依拠した協力関係によって家畜の放牧管理がおこなわれていることや、家畜に対する独特な価値観や共同体的な資源利用の形態が保持されてきたことが、遊牧を維持するための重要な基盤をなしていることも、本論文は明らかにしている。すなわち本論文は、遊牧という生業が維持されるメカニズムを生態と社会・文化との両側面にわたって解明したものと評価することができる。

本論文の第二の貢献は、町の出現と現金経済の浸透という社会的・経済的な環境の変化に対応して、人びとが従来の遊牧を維持しつつ、同時にさまざまな対処方法を模索・実践していることを示したところにある。具体的には、かつては移動性が高かった集落を町の周辺に定着させ、井戸を掘って家畜に給水し、また、市場価値の高いウシの飼養を拡大するといったように、従来の生業を変形させたり、あるいはナイロビなどの大都市に出稼ぎに出て現金獲得につとめ、さらには町にある小売店とのあいだに信用にもとづく「つけ買い」の関係を構築している。こうした変容の実態を本論文は、定量的な資料を詳細に提示しつつ明らかにしている。

このように本論文は、遊牧という生業がかたちを変えつつ持続している側面と、新たな活動が模索・実践される側面との

両方を総合的に分析することをおして、環境の変化に対する遊牧民の融通無碍な対処の過程を明らかにした。そして、こうした対処が可能になるためには、彼らがオポチュニスティックに環境利用の方法を選択することと同時に、社会システムや価値観が維持されていることが重要であると指摘している。

本研究が実施されたレンディーレランドは、とくにつよく乾燥した地域であり、国家による開発介入からもっとも遠いところに位置している。そのため、より降雨量が多い遊牧地域に対して本論文に示された知見がどのように敷衍できるのかは、今後の課題として残されている。しかしながら本研究は、レンディーレという個別社会に関する事例研究にとどまらず、東アフリカの遊牧社会の将来を考える上で貴重な実証的資料を提供し、比較研究のためのひとつの水準を示したという点でも優れた業績である。

よって本論文は、博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年1月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。